

圏外のアンテナ

[菜の花のような人]の巻

時として怒りは行き先を失い、空回りした感情が虚空を漂う。

先日、ビルのエレベーターで、幼児二人の手を引き、一人を胸に抱いた母親と同乗した。

そこに、車椅子の女性が滑り込んできた。明るい、菜の花色のスーツがまぶしい。

ボタンを押すのが不自由な様子で、「二階を押して下さい」と言う。見ると袖の先から手が出ていない。二階に停まると、ニコッと魅力的に小首をかしげ、サッと降りて行く。

とそのとき、「ママの言うこと聞かないとあんなっちゃうのよ！」という、とげとげしい言葉が耳に飛び込んできた。

愚かな教育をする無神経な母親に怒りを感じた。

「ちょっと顔貸して」と言おうとしたが、子供が離れないのは明らか。ならば子供の前で母親を非難してやろうと、悪意から思い、実行に移した。

「あんたたちのママは！」と、ここまでは強く言葉が出たが、続きを「間違ってる」と言おうか？「嘘つきだ」にしようか？で、迷ってしまった。子供は目を見張っている。

あろうことか、わたしの口から出た言葉は、「でべそ！」

しかも途中でひっくり返り、妙な裏声になっていた。

「何、この人！」と、母親は語気荒くののしりながら降りていった。

わたしは、ふがいなさに、泣きたかった。

正義にかられた弱虫ほど、あてにならないと言われる。それが、わたしだった。

=2013年3月21日掲載=



皇居のお堀、桜田濠に咲き始めた菜の花